

南海電気鉄道創設の「南海高等学校」（定時制）ノート

武 知 京 三

はじめに

戦後の学校教育法は、一九四七年三月に公布され、これに基づき、翌年新制高等学校（全日制・定時制）の発足をみた。教育の機会均等の理念から、通常の全日制課程のほか、定時制課程（夜間課程または特別の時期及び時間に授業を行う課程）の二種類が設けられた。定時制高校の修業年限は、一般に四年間で、全日制と同一の卒業資格が取得できるようになったのである。⁽¹⁾

小稿は、南海電鉄が創設した高等学校（定時制）の一側面を「社報」・社内機関誌『南海』などを通して瞥見するノートである。資料の限界は否めないが、戦後復興期の私鉄大手の貴重な試みであったことは確かであろう。

前掲『南海』は、政府の方針に基づく「定時制高校」について解説

すると共に「近くわが南海にも実現されることになっています」と報じている。⁽²⁾ この件は南海電鉄本社の役員会で決定したが、実は勤労青少年教育機関として、戦前四年余り、私立南海鉄道青年学校⁽³⁾（終戦時解消）を設立していたから、その経験を踏まえて新たな方向に踏み切った一面があるのではなからうか。

私立南海高等学校設立の件は、一九四八（昭和二三）年七月二九日「社達」第40号により公示された。その内容は、次の通りである。⁽⁴⁾

昭和廿二年三月法律第二十六号「学校教育法」に基く南海高等学校の経営並びに社員の文化教育を目的とする財団法人南海学園を設立する。本財団の理事長、理事及び監事は次の通りとする。南海電鉄本社の役員が名を連ねている。

理事長 吉村 茂

理事 壺田 修

同 稻次国利

同 吉田卯之吉

同 楠美 喬

監事 中村利孝

同 浅田敏章

昭和廿三年七月廿七日

社長 吉村茂

そして、同日付の社長名による「社達」第41号で財団法人南海学園規程を明示する。さらに、同日付で理事長名による南海高等学校規程、南海高等学校学則、南海高等学校臨時予科学則を定め、南海高等学校開校と同時にこれを実施する、とした。

南海高等学校学則によると、第十一條で定員は、鉄道業務科一六〇名、鉄道電気科一六〇名、鉄道機械科二二〇名、鉄道土木科八〇名とある。第十二條で職員組織を示す。第廿五條で、本校は、授業料、検定料及び入学料を徴収しない、とした。

南海高等学校の諸規程は理事長名となっているが、戦後の「南海復興」に尽力した本社長吉村茂が兼務していた。理事壺田修は高文行政科合格の官僚で鉄道省に入り、運輸省陸運管理局監理部長を経て、一九四七年六月南海電鉄取締役総務局長として招聘された。常務、専務を経て、五六年副社長、五九年社長、六六年会長に就任する。⁽⁵⁾

一、南海高等学校の開校と生誕期の一側面

南海高等学校第一回生徒募集案内には、その趣旨・目的・募集人員などが示されており、新設定時制高校の概要がわかるので、一部を紹介しておきたい。⁽⁶⁾

南海高等学校生徒募集

(前略)

一、趣旨

南海学園は、南海全従業員にとつての文化の園になるために生まれました。南海高等学校は、この学園に開かんとする文化の芽であります。深刻な戦禍の中に勃然社業再建に奮起した。わが南海従業員の知識を昂め教養を深めて立派な産業人を作り出すことは、社業昂隆に役立つのみならず、やがて祖国の再建、文化日本建設に通ずるものであります。(中略)

本高等学校には、本科と予科を置き予科は本科入学の為の学力を養成します。

本科の授業はたとえば「経済」とか「英語」とか或は「鉄道運賃」「電気」等の各講座(科目)を単位制にして三ヶ月毎に一応一単位の講義を完結しつつ前進してゆく制度を採っています。

(以下略)

二、目的

本高等学校は、昭和廿二年三月に発布された法律である『学校

『教育法』に準拠して高等教育を行い併せて社の業務に関連する学智の涵養を図る。

三、学校所在地

伽羅橋駅西方三丁羽衣青年学校校舎

四、募集人員

イ、予科 昼間部、夜間部 各五十名

ロ、本科 業務科 昼間部、夜間部 各四十名

電気科 夜間部 四十名

機械科 夜間部 三十名

土木科 夜間部 二十名

五、志望者資格

イ、予科 小学校卒業生、中学一、二年修了者又はこれと同等以上の学力ありと認める男女

ロ、本科 中学三年以上修了者又はこれと同等以上の学力ありと認める男女

六、修業年限

イ、予科 一年

ロ、本科 四年

予科を修了した者は修了証書を授与する。

本科授業の特徴

一、単位制として一講座の期間を三ヶ月として試験に合格した者には修了証書を授与する。

二、規定の全単位に合格した者には、卒業証書を授与する。

七、授業時間

昼間部 隔日に授業する、各日の授業時間は第一日第二日は十時

より十四時半まで、第三日は十時より十二時までの授業とし、以下これを繰り返す。

夜間部 月曜日より金曜日まで毎週五日間授業するものとし、各日の授業時間は次の通りとする。

自四月一日至九月三十日 十七時から十九時まで

自十月一日至翌年三月三十日 十六時三十分から十八時

三十分まで(中略)

尚、予科及び業務科は本人の都合により昼間、夜間何れかの授業を受けることができるが、電気、機械、土木各科の本科は夜間授業のみとする。

八、開講学科(略)

九、授業料

無料

十、卒業後の待遇

高等専門学校卒業生として待遇する

十一、出願手続き(略)

十二、募集期間(略)

尚予科一ヶ年間及び本科四ヶ年に行う学科は次の通りとする。

学年別授業科目

イ、予科

国語、社会、数学、理科、英語

昭和二十三年八月二日

第三百三十七號

ロ、本科

七百四十八

電 氣 科										業 務 科										科 別	
修					必					修					必					科 別	年 別
英語、電氣鐵道、電氣工事、工場管理、照明・電熱、家政	國語	物理	數學	鐵道概論	英語、簿記、商品學、交通經營、鐵道運賃、電車運轉、施設、家政	國語	物理	數學	鐵道法規	英語、簿記、商品學、交通經營、鐵道運賃、電車運轉、施設、家政	國語	物理	數學	鐵道法規							
	(四)	(四)	(四)	(三)		(四)	(四)	(四)	(三)		(四)	(四)	(四)	(三)							
	社	國	化	電	社	國	化	數	商	社	國	化	數	商							
	(三)	(四)	(一)	(四)	(三)	(四)	(一)	(四)	(四)	(三)	(四)	(一)	(四)	(四)							
	社	國	機	電	社	國	運	貨	手	社	國	運	貨	手							
	(四)	(一)	(三)	(三)	(四)	(一)	(三)	(四)	(二)	(四)	(一)	(三)	(四)	(二)							
			社	電			施	運	連			施	運	連							
			會	氣			設	轉	絡			設	轉	絡							
			(三)	應			(三)	及	輸			(三)	及	輸							
			(三)	用			(二)	保	物			(二)	保	物							
			(三)	號			(一)	安	物			(一)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)	及			(二)	安	物			(二)	安	物							
			(三)																		

備考 一、學科の下部にある括弧内の數字は單位數であつて一單位は三十五時間とする。例えば鐵道法規は三單位即ち百五時間授業するのである

二、本表は實習等に對する單位を省略する。

これによると、南海高校は元羽衣青年学校の校舎を使用したことがわかる。木造の建物であった。男女共学であり、募集人員は予科・本科に分け、昼間部と夜間部を設けている。本科は前述の4科で、授業料等は「無料」、卒業後の待遇は「高等専門学校卒業者として待遇することなどが注目されるだろう」。

第一回生徒募集は、予科九月六日又は七日、本科九月八日又は九日に行う。考查時間は十時より十一時三〇分まで。科目は予科が国語(小学校程度)及び知能テスト、本科は国語(中学一、二年程度)及び知能テストである。入学許可者は、九月十四日の「社報」で発表するとした。⁽⁷⁾

一九四八年九月一日付で、主事菅信義に南海高等学校校長を命ずる、一級社員一人に同校事務長を命ずる、一級社員三人に同校教諭兼事務員を命ずる、二級社員一人と三級社員三人に同校事務員を命ずる、との辞令が出た。⁽⁸⁾

第二期生の入学許可者は、予定より少し早く、九月十日に発表された。合格者は本科業務科(昼間部)四五名、同(夜間部)一一名、電気科(夜間部)四〇名、機械科(同)一一名、土木科(同)は「合格者なし」であった。予科が意外と多く、昼間部五五名、夜間部五〇名、総計一二二名である。⁽⁹⁾

なお四九年一月に、定員を大きく割った業務科(夜間部)と機械科は若干名の補欠募集を行ったようだが、合格者を確認できない。

ここで生誕期の南海高等学校の沿革を示しておこう。⁽¹⁰⁾

一九四八年三月二七日 財団法人南海学園設立 理事長吉村茂
(南海電鉄社長)

同 九月 一日 南海高等学校設置 校長菅信義(前校長
事務取扱)就任

同 九月二〇日 南海高等学校の開校並に入学式挙行
一九五一年三月二四日 理事長吉村茂死去に伴い小原英一(南海
電鉄社長)が理事長に就任

同 四月 一日 財団法人南海学園を学校法人南海学園に
組織変更

一九五三年三月 九日 電気事業主任技術者(第三種)資格検定
一次試験免除の認定を受く

右に示すとおり、「原理と正義を愛し勤労と責任を重んずるを以て校是とする」南海高等学校の開校並に入学式は、一九四八年九月二〇日に社内外の多数の来賓を向え、五三〇余名の志願者の中から考查の結果、入学を許可された二二名全員出席のもとに華々しく挙行された。赤間大阪府知事の告辞、稲次南海学園理事の式辞を始め来賓祝辞・菅校長の激励訓辞があり、「風光明媚の地羽衣海浜に刻苦自己を磨いて社業の隆替に祖国の再建に役立たんとする彼等学徒の意気は大いに上る日」であったという。「我電鉄界に於て定時制高等学校の設立は本校を以って嚆矢とするものであり、各方面より掛けられている期待は極めて大きい」ものがあつた。⁽¹¹⁾ 本校の出現には、労働組合も双

手をあげて賛成していた。

南海高等学校開校後、同校講師委嘱の辞令を出している（日付不詳）。運輸教習所長・主事阿形道一、総務部総務課・同調査課・車両部検車課一級社員三人、勤労部技能課・鉄道運輸部運転課二級社員二人である。さらに二か月余り後に住ノ江電路区一級社員一人を同校講師に委嘱している。⁽¹²⁾

開校六か月後の菅校長「南海高等学校の近況⁽¹³⁾」を見てみよう。第一学期を終つて、第二学期に入っており、向学の徒は孜孜として勉学にいそしんでいた。

第一学期は国語、英語、数学、鉄道概論、物理、理科の各科目で、試験の結果は非常に優秀であつた。某社外講師の国語の試験では「四〇人中、百点満点の者が五人も出た」ので、答案を調べ直したのですが、一点も引きようがなかつた」といふ。専門学校、高等学校からの外来講師の方々も「平常、生徒の態度が余りに熱心なので驚いているが、然し何といつても職場で働きながら勉強している人達だから」と見る。「この生徒達は、決して楽な勉強をしている『学生』ではないのである。朝から晩まで工場で油にまみれて働いてきた人達か、或は終日寒風にさらされながら改鋏を握つて働いてきた人であり、或は駅名呼称に声を枯らしつつ乗務してきた人々である。その疲れた体を強い意志で鞭うつて、『自分を磨こつ』『自分自身を高めよう』と伽羅橋の学舎に運んで来るのである。授業時間に遅れそうになつて伽羅橋駅から学校までドンドン走っている生徒を見受けることがあり、（中

略）こうした姿を見ると、いじらしくさえなってくる。」という。しかも、随分遠方から通学する生徒達がいる。授業を終えて、加太沿線まで帰るもの、和歌浦の一つ向うまで帰るもの、高野山まで帰るもの、岩出からまだ一里以上の奥まで帰るものなど。

彼らは「明るる日は又星明りに起き出して、職業人として、それぞれの職場に出勤するのであ」つた。また「或る変電所から通学している某君、この人の勉強振りには某教授さえ感心しておられるのだが、或る夜ひよつと職員室で顔を合わせたので、『貴方にはほんとに敬服しています』と言つたら、『イヤ 何をおっしゃる、私なんか歳がいつてますから、とてもついてゆけんのですけど、うちえ帰つてぼんやり時間をつぶしてしまうより、こつして勉強さして貰う方が面白いですよつて』そう言つてそゞくさと室を出て行つた。この人の一学期の成績はクラスで四番なんである」と記す。

しかし、「開校以来約一割四分の生徒が休学又は退学した。」その比率の高さには驚かされるが、理由はある病氣のため職務の外に学校へまで通ふことは暫く見合わすよう医師に注意されたケースや父を亡くしたために家庭には病弱な老母一人になり、朝早くから夜遅くまで母親一人家に残しておくわけにゆかぬというもの、あるいは特利のある試験を受けるために受験勉強をしているのだが、その方と高校の勉強と両方していると毎晩寝るのが午前二時頃になるので到底自分の体が続かない。だからその試験をうけてしまつまで休学させて呉れというものであつた。その他、已むを得ぬ事情の為に、この人達は心を残し

ながら退いていった。ある面では、早々に定時制の抱える難しさが露呈したと見るべきであろうか。ただこれとは逆に、府立高校に併設されている定時制高校から、本校へ転校して来た生徒も数名いた。本校の授業時間は職場の勤務時間を考慮していたから、講義を受ける上で他の高校よりも都合がよいというのである。

南海高校は聴講生の制度を設けていた。開校後の様子をみると、この聴講を願ひ出る者が一人ふえ二人ふえ、四八年二月末には一四名となり、四九年二月中旬現在では、さらに増加し、二三名になっている。聴講生が自然に増えてきたのは、「職場で、学校へ通っている者の話を聞いて、『俺も勉強しよう!』と決心して登校しはじめたのである」と見る。「しかも此の聴講生は、名目こそ聴講生であるが、毎日各科目の講義に出席して、正科生と全く同一の勉強をし、学期試験まで完全に受けて立派な成績を示しているのである。」という。なお本校の出現をみて、一方で東洋紡績その他、定時制高校を設立せんとする会社から、照会があったことを付記しておく。

菅校長は、「前途一層の努力は素より覚悟しているが、我々は唯々熱と誠意を以つて本校を育て上げ、生徒の中から『立派な人物』を送り出したい気持ちでいっぱいである。高い教養を身につけた『立派な人物』を作り上げたい希望でいっぱいなのである。」「若いときは決して二度とはない。青春をたゞ漫然と送る勿れ」と私は、心ある青年に、心からそう叫びたい。(二・一四)と結んでいる。

一九四九年五月一八日、南海高校で座談会―勤続30年の古参社員は

語る―を開いている。司会は編集部菅信義、松山茂美、出席者は13名(運輸教習所長阿形道一、労務課人事相談係南本清、霞町通信分区長土居朝造、設計課園田薫、汐見橋駅長西野七治郎、土木課印具廣太郎、難波駅長米田市太郎、春木変電区副長船戸喜代松、審査課長太田久松、工機部技師山川登二郎、堺検車区長堀退助、電気課後藤従久、玉出変電区副長馬野由松―写真(略)前列・後列右よりの順)である。

長時間にわたり、懐しい思い出話を語っているが、大部分は割愛、別の機会に譲ることにし、小稿の関連部分のみを紹介しておく。最後に次のような話題が展開された。そこから、戦前も夜学へ通う人が多かったこと、南海高校へ通う人達の高い評価や同じく大阪軍政部教育部の視察の様子、「年を経て恩を知る」ことなど示唆的な一面を読み取れるだろう。⁽¹⁵⁾

(前略)

堀 昔は向上心が強かった。ですから一生懸命働いて疲れた体でありながら、その上まだ夜学え通う者が沢山いた。人一倍勉強して上え上りたいと努力した。

西野 福島の関西商工へ沢山通っていましたね。

後藤 最近では若い人達の中にも向上心、向学心に富んだ人がかなり出て来たと思いますが。

菅 現在この南海高校へ来ている人達は熱心なものです。あの

熱心さは皆さん認めてやって欲しいと思います。

西野 私の駅からもこゝえ来ている者があるが、駅の仕事もよく出来るし、第一責任感が強い。どの職場でもこゝえ来ている者はきつとそうだろうと思う。

堀 私の所からも二人厄介になつていますが、二人ともうちの模範者です。

土居 私の職場からも四人来ているが皆よい青年だ。私はその人らが入学試験を受ける前に、途中でヘコタレルような意志の弱いことではアカンぞと激励しました。

一同 勤務の外にまだ学問をしようというんだから、ほんとに感心だなあ。

堀 それだけでも終戦後めざめた青年がふえて来たんですね。

後藤 私も昔三年夜学に通いました。勤務を終つてから通うんですから毎晩家へ帰ると十二時でした。時にはエライなあとと思うこともありましたが、ガンバリ通しました。それでもそこを卒業しても会社では雇でほつとかれしました。しかし私は学校を卒業して直ぐ報われないからといつて失望してはいかんと思えます。やるだけのことをやってあげば何時か報われるに違いありません。私は直ぐ報われなくても、それはもつと自分を磨けという戒めだと考えました。

菅 先月大阪軍政部教育部からエライ人がだしぬけに来校されて私いろ／＼質問されましたが、その時その方は教室へはいつ

て行かれて直接生徒と対談し、その後で私に「いかにも生徒が真面目で真剣で質がいゝ感じを受けたが、校長はどういうふうにしてあんないゝ青年を集めたか」と聞かれたりしました。それから一週間程してその方は本社で重役さん方とお会いになつて色々話をせられ生徒を褒めておられたそうです。

西野 職場の長主任も時々学校へ来て生徒のことを話し合うようにしようじゃないか。

園田 校長にお願いしたいが、生徒が体をこわさぬよう心掛けてやつて下さい。

菅 私もその点心をつかつています。何分一人前働いた上に勉強するんですから、ああした末頼もしい青年達が、どうぞ体をこわさぬようにと念じています。

米田 あらゆる面で従業員の資質向上が望ましいですね。その為には、上の人や古い者が若い人にあんまり遠慮してもいかんと思う。注意すると気に入らん人もあるようだけれど、自分の胸に落ちんなら得心のゆくまで質せばよいと思う。それこそ言論自由だ。又上の者も若い人に欠点があれば得心のゆくように説いて上げるべきだと思う。私昔染川さんや山田久太郎さんに相当厳格にやられたが若い時に厳格にやつてもらつたからこそ今日まで来られたんだといつも感謝しています。私難波え参りました時も早速山田さんに御礼に報告にゆきました。

堀 「云つても駄目だ」「憎まれても損だ」とほつておかず

に、悪い所があれば深切に注意してあげ、良い所はどこまでも認めてあげ褒めてあげるべきでしょうね。

(中略)

阿形 私は十六で入社したんですが、昔佐野の市川駅長は、朝駅え出るとまづ先に駅の便所掃除をせられた。駅長自身便所掃除するのはどうかと思いますが、とも角市川駅長は何かにつけて率先範を垂れる人でした。だからずいぶん厳格でもあった。しかし、若い自分に厳格に仕込んで貰ったことは今になつてみると、ほんとに有難く感謝されますな。

一同 同感ですね。

菅 では、随分長時間に亘つて色々面白い話を伺わせて頂きました。どうも有難うございました。皆懐かしい思い出話は、まだく際限もなく、語り盡せないものがありでございました。初夏の陽射しももう暮れかけて参りまして、これじや労働基準法のイハンになりそうですから(笑声)では、この辺で、どうも有難うございました。

松田 長時間、どうも有難うございました。

次に在学生の声を少し見てみよう。深日変電所・A「南海高等学校に学びて」⁽¹⁶⁾は、入学式当日菅校長曰く「高等学校を設立したものの敗戦以来のこんな世の中にダンスや映画ならともかく高等教育なんか始めても果たして募集人員に満つたろうかと重役方から云はれて危惧の

念を抱いて居った所、さて入学願書を占め切つて始めて意外なる応募数に、今更乍ら諸君の向学心に驚いた云々」を取り上げ、――これを聞いた時、我々は悲喜交々にとても云ひませうか、余りにも我々の向学心を過少評価された事に付て非常に悲しみを感ずると共に其の反面斯くの如き向学の青年が馳せ参じた事はひたすら燃えるが如き向学心の発展に外ならぬと気を強く致したのであります。(中略)さらに「正科の他に聴講制度も設けられ他の学校に例を見ざる諸講師方の熱誠溢るゝばかりの講義。その一言一句迄も聞き逃さじと向学の熱意に燃える生徒諸君の勉学の姿は何ものにも例える事が出来ない程崇高そのものである。此処に職員、生徒一丸となつて自己を錬磨し我が南海の社運の興隆に、引いては日本の再建に努めて居るのであります。」(中略)「嘗つて札幌農学校(北大の前身)に教鞭を取りしクラークが日本を去るにあたり、その教え子達に残した Boys be ambitious なる言葉。此の言葉こそは真に敗戦日本の我々青年にとつて重大なる意義があると思ふのであります。我々は此言葉を肝にめいじ大いなる希望を持つて奮励し少しでも国家の復興に役立ちたいものだと思ふのであります。」(中略)最後に、「やがては二年、三年生と次第々々に生徒の数も増加し、教室の増加、講師の増員も必要でしょう。我々生徒として本高等学校をより水準の高き南海大学迄発展さし、其処に於て我が南海電鉄青年層悉くが大学の課程を修了し、より良き南海に発展さすべく努力しましょう。南海高等学校を設立された会社側の厚意に対して、私は生徒として所信の一端を披歴するのであります。」述べて

いる。

Aはさらに次号で「向学の友に寄せて」⁽¹⁷⁾を書いてゐる。新学年開始を前に自らの一年近くの経験を踏まえて、南海高校への入学を呼びかけたものである。30年勤続の方々の座談会(南海第七号)の席上で、電気課後藤さんの「私も昔三年間夜学に通いました。(前掲)」を読んで私は頭が下がりました。」とある。Aの右の一文は以下のようである。

(前略)終戦直後に比べるとこの頃の世の中は大分明るさとなりもどしたかに見えますし、文化施設も徐々に復興しつつありますが、しかし最近の諸事件を考え合わせると、勤労青年に対する教育が切望されます。

こうした時代に、わが社において会社自体が経費を負担して我々社員の為に高等教育機関たる高等学校を経営してくれていることは、私達社員にとつて願つてもない制度だと思ひます。(中略)

本校には四十を越えてなお黙々と勉学しておられる方がありますが、私は常に、その方のことを思つて、若い自分が負けては恥かしいと、自分を励ましております。

本居宣長の歌に

折々に遊ぶ暇の有る人の
暇なしとて文読まぬかな

とあります。私は人生即勉強だと考えるのであります。

お互いに務めを持つ身でありますから、前途には苦勞はありましようが、それを切り拓いて行つてこそ、私達の人生に光明を見出し得るのではないでしようか。

南海高校に学ぶ私達生徒は、楽しく学業に勤務に邁進していきます。

或る時は私達で自治会やクラス会を開いて互の意見を交換したり、時には一同打ち揃つて沿線に出かけて、緑陰に海浜に互の抱負を語り会⁽¹⁸⁾つたり、励まし合つたりしています。又時には、職場に働きつゝ学ぶ私達生徒が、前日の又は昼間の疲れで勉学に支障を来してはいけないとの諸講師の思いやりから、教科の余暇に世間話や時の話題に花を咲かせることもあります。

職場によつて就学に難易はあるでしようが、しかしその点については、本校は他校と違つて、午前、午後、夜間に授業があるから入学者はそれをうまく利用することをおすすめてします。

(以下略)

府立高校から本校に転校してきた天下茶屋駅・Bは「新学年を迎えて」⁽¹⁸⁾の結びとして、同様にどんな障害があろうとも、又どんな誘惑があろうとも、不撓不屈の精神を堅く持つて、お互に励まし合つて「牛歩よく千里の道を致す。」という意気で頑張り新しい文化は新しい私達の手で築きませう。最後にあなた方の新入学を心から御祝福申し上げる次第で御座居ます。」と述べている。

三田市変電所・Cは「私の勉学観」⁽¹⁹⁾と題してこう述べている。「前

略) 勉学とは何ぞや。(中略) これを要約すれば、学問を修めつとめる事で、修得するだけが勉学なりとは言い得ない。習得したものを実行してこそ、勉学と言つ事が出来る。これをもつと具体的に述べるならば、勉学とは凡てすぐれた人の立派な行い、良い事業を学び、自分もこれに劣らじとつとめる事である。

多年に亘る道德の退廃の結果、現在に於ては学校教育とは肩書をとる為の教育である感がある。(中略)

私も南海高校当時、中等学校卒業者にして、「新制高校入学の意味なし」と忠告をつけた事があつた。これも学校を肩書とりの処と妄想する一人ではあるまいか。然らば勉学には何んな目的があるのだろうか。知識を高める為に、ひいては人格を高めんが為に、そして究極のところは道義の実践につとめるに外ならない。名利を求めず、文辞を事とせず、只己れの学問の為に、雨の日も嵐の日もたゆまず励んでいる南海高校の兄弟に、私は心から敬服する。事にあたつて、利害に目がくらみ、彼等の博学を以てしても遂に決断し能わず(中略) 贈賄収賄組も、いつに勉学の目的を誤つた結果である。(中略)

私は道義の復興の為、即ち新しく清く蘇らさんが為、勉学の意義目的を痛感せざるを得ない。(中略) 故に新日本建設のために、我等青年は大いに勉学の意義に徹し、修得せる学芸を以て実社会に活躍出来るよう励む可きである。

南淡輪駅・Dは「愛する南海学校⁽²⁰⁾」と題し、「我々の慈父菅校長先生曰く『諸君本学年もなかば過ぎたが百里を旅する者は九十里を以て

なかばとすべし』という。諸君よ！たゆまず頑張れ」と激励されました。私達生徒の情熱は奔流の如く湖にそゞろ。我々の前途にはやがて淡い夜霧は晴れて大いなる希望の朝は到来し、輝やく社章羽車と共に雄々しく平和日本を説き、そして大南海の礎になる秋が私達若人の上に訪れることはまもないことでしょう。我が愛する母校よ健在なれ。」と述べている。

菅校長「学園一年有⁽²¹⁾半」は、南海高校の評判、定時制の意義、本校の授業の特色などについて、次のように書いている。

(前略) また社外からみえる各講師は「教職に携っている自分達は、この頃の学生、生徒の態度や勤勉振りを毎日見ているわけだが、こゝえ来て教壇に立つとまるで空気が違う」といつておられる。

外部の人達がひそかに当校の生徒を褒められる事実を思えば、私が生徒の真剣さを喜んでゐる気持は、単に私だけの親馬鹿心理ではあるまいと思う。

広島大学の某博士は、「戦後刷新された教育制度中、これわと感心する点は別段ないが唯一つ定時制高校だけは実に名案である」といつておられる。浪速大学(現大阪府立大学―引用者)の某教授は、「働きながら学ぶ南海高校の如き制度においてこそ、ほんとに真剣な生徒が生まれるのではないだろうか。実社会とマッチしたほんとの教育が行えるのではあるまいか」といつておら

れる。

つい先頃、大阪府教育委員会事務局の某指導主事が来校された時、私は――

当校では、たとえば数学の時間に、鉄道の曲線半径や上り線の勾配計算を説いたり、或は、法学通論の一部としての鉄道法規の時間に、値上前に発売された乗車券は、値上後にそのまゝで有効であるかどうかの問題等について民法や商法上の「契約」との関係を述べる等、「学科」と「実務」との併行を意図しているが、かようにして務めて定時制高校の特色を持たせたいと思っている。

というようなことを話したが、某主事は之に対して大いに賛同された。

最近世間では、学費一切親がかかりで昼間の学校へ通っていた学生で、夜間の学校に転校し、昼は職を求めて自ら働く者が次第にふえている。現下の経済事情がそうせしめるのであるが、そこいくと当校の生徒は、就職難のこの時代に、会社で職の安定を得つゝ、そのかたわら勉学の機会を與えられているのだから、まことに恵まれた環境だと思ふ。本人の意志次第、努力次第で高等教育が受けられるのである。

去る十月三日、第二期生として百名の生徒が新しく入学した。⁽²²⁾その日南海学園理事とし入学式に臨まれた稲次常務取締役は、生徒に対して審さに世相の現情を説き、社が高校経営の理念を述べ、ここを諸君の人間完成の道場として、智能、教養を高め、かたわらに徳を研いて

優秀善良なる社員となり、国家社会の一員として立派な人物になつて頂きたい、と諄々として述べられた。

社の前途を考え、国家の将来を想つて、教育の重大性を高校経営の実践に移された会社当局者の心を付度するとき、在校生諸君は前途に一縷の光明をみとめて、現在の職務の上にも自から張合が出るだろうと思ふ。

昨年入学後已むを得ぬ事情で休学していた者の中で、十月の新学年になつてから、もう一度原級に籍を置いて勉学に再出発している者さえ数名ある。捲土重來の意気壯とすべく、十月以来次々に新たに聴講を願ひ出る者もある。

働きながら学ぶことは楽なわざではない。しかし刻苦勉励の数年は、やがて歡喜の夜明けに続くであろう。

「耐え難きに堪えたるは、思い起こす毎に愉快なり」と古人も我らに訓えている。(一一・三〇)

一九四九年九月二八日発表の開校一年後の進級状況⁽²³⁾(昼間部・夜間部合算)を見ておくと、本科では、業務科第一学年から第二学年に進級した者は二四名、電気科の第二学年進級者は三〇名で、計五四名である。予科の課程を修了し、本科第一学年に進級した者は五七名で、合計一一一名。予科、本科合わせての進級率は、休・退学者(一五%と推定)を除いて試算すると、六〇%を超えている。沿線の広い範囲の職場からの通学者が少なくなかったことを付記しておく。

二、感激の第一回卒業式と台風下の第二回卒業式

南海高等学校第一回卒業式は、一九五二年九月二十九日午前一〇時から学校講堂で挙行された。小原南海電鉄社長(南海学園理事長)、稲次常務取締役(同理事)、その他多数の部課長が列席し、社外からは大阪府の私立学校係長を始め、大阪府私学総連合会々長・瀬島大阪交通短期大学理事長、近畿大学附属高校長、大阪工業大学附属高校長、大阪電気通信高校長、湯浅学園理事⁽²⁵⁾ら多数が来臨された。式次第に従って「式は盛大厳肅裡にすゝめられたが、会社によって経営される特異な高等学校として、来賓の方々に強い印象を与えたようであり、『職員と生徒の間に、温い生きた血が流れている』と感激して帰られた社外来賓もあった⁽²⁶⁾」という。

卒業生は昼間部、夜間部併せて四三名(業務科一七名、電気科二六名)で「一同の面は喜びと希望に輝いていた」と伝えられる。運輸部門に所属する者は隔日昼間に、工場・変電所技術部門に勤務する者は夜間に通って勉学を続けたのである。

優等賞を授与されたものは四三名中一四名(業務科八名、電気科六名―引用者)であるが、この人たちは一学年から四学年までの全学年を通じて履修した全科目の総平均点が八十五点以上の者であって、このすばらしい成績は稀にみるところであり、更に精勤賞を授与された者は九名(業務科七名、電気科二名―同前)もあったが、勤労学徒でありながらこのような好成績をあげている実情は、「式当日の社外からの来賓がひとしく驚嘆されたところである。」なお文部省の定め

よれば南海高校は修業年限四か年を通じて三千時間授業すればよいことになっているが、同校ではこの四か年に昼間部は三千二百一時間、夜間部は三千二百三十七時間授業しており、精勤賞をもらった者は、三千時間以上登校出席しているのである。

外部団体の賞状受賞者(大阪府立私立連合会々長賞・日本私立中等高等学校連合会々長賞・大阪実業教育協会々長賞・産業教育新興中央会々長賞)は、業務科、電気科各一名、計八名であった。

『社報』資料⁽²⁷⁾によると、業務科卒の職場は運輸部が多く、庶務課一名、難波駅四名、岸ノ里駅二名、浜寺公園駅三名、堺東駅二名、北野田駅・紀伊細川駅・平野駅各一名、事業部中古古運転場一名、南海電気鉄道病院一名である。

電気科卒は運輸部住吉東駅一名、電気部二〇名(電気課・通信課各一名、玉出変電区・吉見変電区各二名、狭山変電区一名、住ノ江通信区・霞町通信区各四名、和歌山通信区二名、堺東通信区・難波電機区・難波灯力区各一名)、車両部二名(堺検車区・大和川検車区各一名)、天下茶屋工場三名である。電気部所属が圧倒的に多かった。

校長式辞、理事長告辞(概要)、府知事祝辞を抄録すると、以下の通りである。なお四年前、南海高等学校開校式当日大阪府私学総連合会代表として臨席された瀬島源三郎が壇上に立って感激の祝辞を述べた、と伝えられる。

校長式辞

（前置挨拶省略）

卒業生諸君、今日こそ私は諸君に心から御芽出度うと御歡びを申上ます。過去四年間諸君はほんとうによく頑張られました。（中略）四年前本校創立のことが具体化し、これが初めて社内に発表されました当時は、なんといつてもまだ終戦まもない頃で、あのとおり世相の混乱した時でありましたから、そうした時に、高等教育を受けたいものは来ないかと呼びかけてみたつて、恐らくそんな希望者は極めて少いだろうというのが当時社内多くの方々の意見だったのであります。従つて私は、生徒募集をしてみても、万一にも入学希望者が、僅かに指折り数える位しかないというようなことだつたなら、私は、自己の不明を上司に詫びるために、潔く辞表を提出する覚悟であつたのであります。

ところが、第一回入学試験、つまり今日卒業される諸君が四年前に入学試験を受けた時には、実に六百余枚の願書が提出されたのであります。

私はそれを見て、なぜということもなく、「日本はまだ亡びん！」と思つたことでありました。

当初のこうした事情は、今日こゝにご臨席の稲次常務が御記憶のことかと存じますが、その入学試験を終つて幾日か経つたあとで、常務から「菅君、腹切らずに済んだなあ」といつて笑われたことがあつたのであります。（中略）

どうか諸君、この学園を去つてのちも、こゝに学んだ四か年を

忘れず、こゝに学んだ知識と精神を以つて、社にあつては熱心、真面目な社員として、世にあつては善良なる社会人として、将来益々健闘されんことを、私は、心からお祈りいたします。

伝教の語に、「一隅を照すものは国の宝なり」という言葉があります。一隅とはいふまでもなく一つの隅であります。諸君は、会社の職場々々でそれ／＼の場所を受け持つています。その一つの持場、それがつまり「一隅」であります。「一隅を照すもの」は「職場の光」であり、職場の光りである者は、会社にとつては会社の宝であり、国にとつては国の宝であります。

どうぞ諸君の一人々々が、職場々々で一隅を照す人物となつて頂きたい。

なお諸君が四年間こゝに学んだのは、唯單に学校所定の科目を学んだだけではなく、学ぶということを学んだ筈であります。その意味では、諸君は、今日学校は卒業しても、学ぶということを卒業してしまつたのではないのであつて、学ぶということは諸君の将来一生の問題であります。見るもの、聞くもの、凡て学ぶべき対象であります。

どうか四年間学んだこの学園を諸君の心の故郷として、将来に向つてます／＼努力されんことを、私は祈つてやまない次第であります。以上一言、諸君を送るに當つて私のはなむけの言葉いたします。

理事長告辞(概要)

本日南海高等学校の第一回卒業式に当り、ここに澁刺たる諸君にお目にかゝれて、私は心から嬉しく感じ、諸君の為に御喜び申上げる次第であります。

顧みますれば四年前、わが南海電気鉄道において、南海学園を開設しました当時は、当社は未だ戦災の傷手甚しく、会社復興の前途に幾多の困難が予想されていたのであります。

しかしながら当時、われ／＼の考えとしてまして、会社再建の為に営業の面で粉骨碎身すべきは当然であるが、終戦混乱の余波尚消えず道義退廃の世相を思いみる時、われ／＼は直接営業の面で努力するかたわら、他面従業員の精神の面を忘れてはならないと痛感したのであります。

思想が乱れ、道義が頹れ、教養の必要が忘れられたのでは、如何に事業の外面にのみ力をそゝいても、真に世に誇り得るが如き充実した会社にはなり得ないと考えたのであります。

古語にも、十年の計は樹を植うるにあり、百年の計は人を植うるにありとか申します。人を植える、即ち人物を養成するということは、一会社にとつても、大きくは一国家にとつても、最も重要なことであると存じます。

かように考えた結果、向学の心に燃える従業員の為に、高等教育を施す機関を設けて、教養を高めると共に、事業上各職場々々に必要な専門的知識の向上充実を図ることは、ひとりわが南海内

部の人心興隆に寄与し能率向上に役立つのみならず、社会の公器を以つて任ずる交通運輸事業に携わるわれ／＼として、いさゝかなりとも祖国日本の復興に盡す一端であると確信して、こゝに本学園を創設したのであります。

今や祖国日本は世界の列国に互して、独立の一步を踏み出し、我南海は、六千従業員の結束努力によつて、今や戦前の状態近くまで復興いたしましたが、世界の情勢を思えば前途はなお荆棘の道であり、我南海といたしまして、私鉄の王座を以つて誇つた往年の大南海再現の為に、なお一層の努力を要するのであります。(中略)

凡そ何処に於きまして、第一期生というものは非常に注目されるものでありまして、諸君が南海高校の第一回卒業生として、今後職場で働く場合、職場の先輩同僚は、高校の課程を終えた諸君が、どんな人間として職場で働くであろうかと注視するし、また諸君の後に続いて本校に学ぶ在校生は、先輩としての諸君が将来どんなになつて行くかと、じつと見守つているでしょう。(中略)

どうか過去四年間当学園に学ぶことによつて身につけた立派な教養を基として、わが南海の一従業員として、又国家の一員として、将来益々健闘されんことを、衷心からお祈りする次第であります。

府知事祝辞

(前略) 諸子は入学以来世態環境等学修に極めて不利困難であつたにもかかわらず、万難を排して刻苦精勵一意研さんに努められ平均八十点以上という稀にみる立派な成績を以つて所定の学業を習得せられ、本日この榮譽を担われたことは、まことに感激に堪えぬところであります。まして齢四十を過ぎてなおよく勉学にいそまれた方のあることは、人生は一生修業であることを身をもつて範を示したもので、限らない感謝と敬意を表さずにはいられないのであります。(中略)

終戦後諸般に亘つて多事多難、種々の変改があつたにもかゝわらず、一切の利害を離れて一意学校創立の精神を体し、新時代の教育精神に即応して、よくその特色を発揮せられ、終始一貫学生の健全な育成に日々精勵されました賜でありまして、学校当局並びに関係各位に深甚な敬意と感謝のまことを表するものであります。(中略)

凡そ人類發達の根元をなすものは交通機関にあるのであつて、斯道の發達なくしては人類の文化も幸福もないのであります。今後我が国が世界文化国家の一員として立派に互して行く与否とは、かゝつて諸子の双肩にあると言つても決して過言ではないのであります。

されば諸子は、今後ますます業務の研さんと人格の向上につとめられ、よき社会人として又文化国家建設の先驅者として、斯道

の發達に貢獻されます様念願致します。

終りに望み、南海学園の御隆昌と卒業諸子の御多幸と御健康を祝福して、私の祝辞といたします。

昭和二十七年九月二十九日

大阪府知事 赤間 文三

今回の卒業生の中から、四名(難波駅二名、岸ノ里駅・北野田駅各一名)が大阪商業大学の編入試験を受け、これにパスして引き続き勉学に励むことになった。全員優等賞受賞者である。その中の一人、岸ノ里駅・E「南海高等学校の回想」⁽²⁸⁾は、こう書いている。

「力筆達」と西郷南洲は言われました。私は此の言葉をモットーとして、ともすれば消えそうになる勉学への情熱を掻立て、去る九月廿九日、南海高等学校第一回卒業生の譽を頂く喜びに浸る事が出来ました。此の歡喜は過ぎ去つた星霜を振り返つて觀ます時、一人深いものがあります。あの敗戦直後の暗い世相の中で、心の寄所も無く、たゞ刹那々々の享樂に耽り、年月を無意味に重ねていました時、会社当局に依つて、鉄道人が働きてゝ学び得る学校として、高等学校が創立されるとのニュースを聞き、私の心の琴線は強く共鳴し、再び学問への情熱と健康な希望を抱く様になりました。

幸いにして望叶えられ、第一回生として多数の好学の兄弟と

共に門を潜る事を得ました。その後四年間と云うものは、校長先生始め諸先生方の情熱溢れるばかりの御薫陶と、御鞭撻によつて、一般的教養については云ふまでもなく、鉄道自体の事は、西も東も分からぬ幼児の様な私を一応鉄道人として恥ずかしく無い様にして下さいました。尚又よりよき人間としての情操を深く植付けて下さった事は、私生涯の一大収穫であり、真心の故郷を得た心地であります。

在学中の回想に耽つていますと、校長先生の「学びの道は険しく、丁度山登りをする様なものだ、倦まず弛まず、黙々として進みなさい」「千里の旅は後一里という所から初まると思いなさい」等、入学当初から時に触れ、折に触れての激励の言葉の数々、又先生方の温顔、真心の籠つた講義、共に語り励み合った学友の健康な姿、楽しかつた事、辛かつた事、等が走馬燈の如く次から次へと浮かんで消えて懐しさで一ぱいになります。特に卒業式には、社長殿を初め、各部課長殿、更には教育界の名士の御参列を頂きました、あの晴やかな思出は私の脳裏深く刻まれ、いつくまでも消す事の出来ない感激となるでしょう。

尚在学中の諸兄には、健康に留意され学びの道を真直に進んで下さい。又社内の愛学の皆様が、続々と南海高等学校に学ばれ、私達の愛する母校をより良く、盛り立てゝ下さい。私も母校の愛情に報いる為尚一層の努力を続けます。

前後致しましたが、学校当局の方々恩師の方々に、又深く御理解下さいました現場の皆様が衷心より御礼申し上げます。羽車の大いなる飛躍。南海高等学校の隆盛を願つて止みません。(南海高校卒業生)

最後に「思えば本日芽出度御卒業の先輩諸兄と私たちは、共に南海電鉄の職場で社業に従事する傍ら、志を同じうしての学舎に通い、諸兄は私達に、ある時は激励を加えられ、又ある時は楽しく語り合つて下さいました。諸兄はまことに私達にとってこよなき心の兄でありました。」と思ひ出をこめた在校生の送辞が朗読された。これを受けて、「かくも盛大な卒業式を挙行せられ、来賓各位、理事長並に校長先生から親しく御懇篤な御言葉を賜り、在校生からは親愛に満ちたはなむけの辞を戴きましたことは、私達卒業生にとって終生忘れ得ぬ感激であり、心から感謝に堪えません。」そして、前途への力強い決意を示した答辞が朗読された。「送る者、送らるゝ者、互の心の琴線は強くふれあつたことであらう。」といわれる。かくして意義深い南海高等学校第一回卒業式は幕を閉じた。

第一回卒業式は秋晴れの好天にめぐまれたが、第二回卒業式は台風13号の影響でまさに「台風下の卒業式」となった。菅校長の一文によると、「卒業式を決定できるか危ぶまれたが、卒業生全員揃つていて、予定通り挙行と決まつた」。この「台風では、社外の来賓は、とてもお越しになれないだらう」と話し合っているころへ、府の

文教責任者や私学の校長らが次々と来校された。社外講師、本社部課長の一部の顔も見えた。卒業生は昼間部、夜間部合わせて四九名（業務科二九名、電気科一八名、土木科二名である。午前十時予定通り式が始まった。「猛烈な風が講堂の窓を打ち、すき間から雨さえしぶき込む。しかし多数の来賓を迎えて栄えの卒業式に参列する卒業生や職員感激は」ひとしおであり、「式場は和やかな中にも厳肅な空気が満ちあふれている」と伝えられる。

「校長、理事から卒業生に対して在学四力年（予科から進学したものは五ヶ年間）よく初志を貫徹して勉学を続けた労を褒めかつねざら、将来ますます何事にも努力することを怠らず、また生涯常に学ぶという心構えを忘れぬよう、一面南海の従業員として能く精励するよう一場の訓示があつた。」殊に稲次理事は「昨年もこの学園から数十名の卒業生を送り出した。今年もまたこのように澁刺らる諸君を職場に送り出す。かくて来年、さらい年と、年々、心を鍛え学に励み、努力の尊さを身に以つて味った生徒諸君を、わが南海の職場に送つてゆくことに、大きな期待と喜びを持つのである」と語つた。卒業生一同は、上司の期待を裏切ることのないよう将来一層真剣に働かねばならぬと深い感銘を受けたのであつた。

最後に、在校生代表が送辞を述べ、卒業生代表が答辞―学園を巣立つ歓びと決意を披歴して、正午前無事卒業式を終えた。気象台の予報通り、その頃から風雨は一段と激しくなり、門前のアカシヤの一樹は早くも横倒しになつて道路をふさいでいた。

三、受験生の激減から清風南海学園へ経営委譲

一九四九年十月三日、第二期生一〇〇名が入学したことを前に述べたが、その人数は前年の半分にも達しなかった。その後も受験者減は否めなかった。というのは、有名な五六年度の「経済白書」が「もはや戦後ではない」と述べて注目されたが、高度経済成長と共に高校への進学率が向上したからである。「昭和26（一九五二）において四五・六%であつた高校進学率は、10年後の昭和36（一九六一）年には60%の大幅な突破³⁰⁾する。一般に、定時制高校は五三年をピークとして戦後の高校教育拡大の一躍を担つてきたと見られるが、全日制への進学率の増加によって減少傾向となる³¹⁾。定時制のみの南海高校は受験者減が深刻となり、次第にその対応が喫緊の課題となつてくる。

前掲『大阪の私学』によると、一九五七年十二月十七日菅校長死去に伴い森田正基が校長に就任、教育方針は「勤労青年の教養を高め、鉄道業務に関する専門知識を授け、品性を陶冶し、有為な人材の育成を期す。」とある。鉄道業務科・鉄道電気科の二科で、定員は各一六〇名（男女）となつてゐる。理事長小原英一、教員五名である。校長は南海電鉄本社の部長クラスが就任するようになる³²⁾。同時期刊行の『一九五八年度大阪府学校一覧』によると、南海高校は定時制のみで（男）、在校生徒数一〇五名に激減³³⁾している。

南海の一期生はすばらしい成果をあげ、各方面で賞賛されたが、基本的には南海電鉄が従業員の教育機関として設置した企業内高校であり、生徒募集が限定的であつたことは否めないだろう。本社には、漸

次高卒入社が増加し、南海高校への受験生は激減する一方だった。

こうした傾向を卒業生の推移から見ると、一九五五年九月卒業では、業務科一九名、電気科一〇名、計二九名であったのが、六一年三月の場合は、業務科一〇名、電気科五名、計一五名に半減しているのである。⁽³⁵⁾

一九六〇年度の卒業式は六一年三月二五日一〇時三十分より挙行、当時の学年歴は、四月～三月であった。なお六一年度第4学年の第一期授業(四月～六月)は10時～12時、12時30分～14時30分で実施する、保健体育の授業日は後日通知するとしている。⁽³⁶⁾

南海高校は、受験者が「皆無になる」⁽³⁷⁾という最悪の事態に陥ったともいわれ、一九六二年には、まさに廃校寸前の危機となっていた。南海電鉄の壺田社長(南海学園理事長)の時のことだが、当時上六の清風高校にも定時制があり、「OB教諭による特別座談会」の中で、平岡英信(清風南海学園理事長)は「定時制高校の集まりがあつた時に、南海高等学校の方から、できたら清風さんでうちの学校を買収してくれないかといった話が出て参りました。」⁽³⁸⁾と回想される。

南海電鉄側では、南海高校の廃絶は忍びないと考えており、「学校法人清風学園を創設し、仏教を中心とした宗教による教育を実践していた平岡静人(以下、僧名宕峯)こそ後継に相応しい人材と白羽の矢を立て全面委譲する計画が進められることになる。

清風南海学園の年史(誌)は、その経緯を次のように書いている。

以下、概要を略記する。⁽³⁹⁾

一九六二年十二月二六日午前10時より南海電気鉄道の会議室において緊急の理事会が、また同日午後4時より評議員会が開催された。事態は急を要し、矢継ぎ早に決断が下された。その結果、学校法人南海学園を学校法人清風南海学園と改称すると共に平岡宕峯を理事長に選任し、清風南海高等学校校舎建設に関しては平岡理事長に一任する旨、さらに寄付行為一部変更の承認、平岡理事長を終身理事とすること等が定められた。

平岡宕峯理事長は、かねてより「泉州地域に私立男子高校を新設したい」との構想を抱いていたが、同時期、堺市教育委員会や泉北地域の自治体においても、同地域への高校設置を切望していた。これらの動きを背景に、生徒急増期だったので、開設許可も容易にとることができたという(六三年二月一六日認可)。同年四月に学校法人清風南海学園を設立、清風学園の姉妹校として清風南海高等学校が高石町(現高石市)に誕生する。本学創設を見越して土地の買収を開始していたが、50余軒の農家との交渉は實に困難の極みであったという。法人告知の広告は毎日新聞に掲載され、また清風南海高等学校掲示板にも掲出された。なお寄付行為申請書には全日制課程と定時制課程の2課程とする旨の記載があるが、実際には全日制課程のみの開校であった。新校舎の完成は同年七月、それまでは清風高校の建物での「間借り授業」で第一歩を踏み出す。清風南海高校は平岡宕峯の掲げる理念の下、次世代のリーダー育成をめざして、名実ともに着実に成果をあ

げていることは広く知られる。

清風南海学園は、南海電鉄の強い要望があったため、「校舎こそ文
化的歴史的価値を有するものとして既存のまま譲り受けたものの、南
海高等学校とは教育内容も教育目的も全く異なるものであり、いわば
『学校法人』という看板のみを譲り受けたというのが実情であつ
た。」⁽¹⁰⁾と書いている。南海高校の校舎は清風南海学園の事務所として
活用されることになった。

おわりに

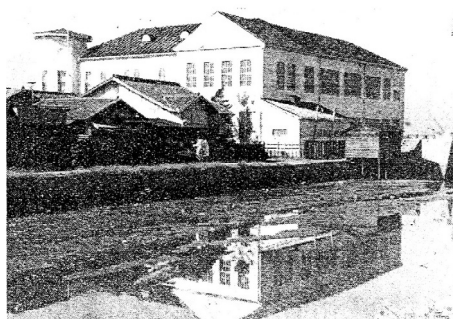
以上、一般にはあまり知られていない南海電鉄経営の企業内高校
(定時制)の軌跡を資料紹介的な形でみてきた。戦後混乱期に立ち上
げた意義は小さくないと思うが、時代の変化をみた場合、限界もあつ
たことは否めないだろう。一九六四年三月三十一日、学校法人南海学園
は廃止となる。

南海高等学校の建物は、いわば南海電鉄創設時の駅舎(阪堺鉄道)
であり、設計は著名な建築家辰野金吾で、日本銀行本店(一八九六
年)をはじめ、多くの名建築の設計者としても広く知られている。初
代駅舎の開業は一八八五(明治一八)年十二月二十七日、木造二階建て
で、屋根上にとんがり帽子をいただく時計台が乗っていた。不幸にも
開業二年余の八八年二月に焼失した。⁽¹¹⁾

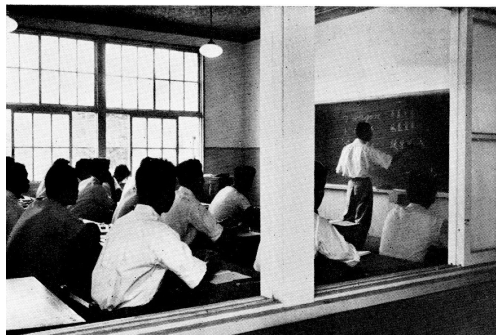
最後に、『南海』No.42に収録されている改修後の校舎(一九五六年

秋)と『南海七〇年のあゆみ』に出ている授業風景の写真を掲げてお
きたい。

芦田川に影を映す南海高等学校(校舎)



授 業



注

(1) 戦後の学制改革、いわゆる六三制は多義的であり、広義には大学ま
での六・三・三・四制の総称、六・三・三制は初等・中等教育制度の
略称として用いる場合が多い。そして狭義の六・三制は小学校6か年
と中学校3か年の義務教育段階をいう(佐々木毅ほか編『戦後史大事
典』増補縮刷版、九五四―九五五頁、三省堂、一九九五年。『戦後日本
史辞典』二二〇六頁、岩波書店、一九九九年)を参照。

(2) 『南海』No.3、一九四八年七月、二二頁。

- (3) 私立南海鉄道青年学校開校式については、南海鉄道(株)親和会『親和』第26号、一九四一年六月、二八—三〇頁がある。
- (4) 以下、『社報』一九四八年七月二九日付による。
- (5) 両社長については、拙稿「新生『南海電気鉄道』の諸動向—社内機関誌『南海』に見る一断面—」「社内誌にみる南海電鉄史の一断面—一九五〇—一九七〇年—」「大阪商業大学商業史博物館紀要」第17号、第18号、二〇一六年十月、二〇一七年十一月を参照。
- (6) 以下、『社報』一九四八年八月二日付による。
- (7) 『社報』一九四八年八月二六日付。
- (8) 『社報』一九四八年九月二日付。
- (9) 『社報』一九四八年九月二三日付。
- (10) 大阪府総務部教育課・大阪府私立学校審議会編『大阪の私学』二二〇頁、一九五八年、非売品。その他による。日付は南海の「社報」によるところもある。
- (11) 『南海』No.4、一九四八年一〇月、二四頁。なお八月三〇日に本社技能課宛に欠勤中の従業員から「社員一同の教養の向上、併はせて労資協調に資する様にと五百円の贈与の申出があ」り、この資金で図書を購入することにした。購入図書は、本社図書部に備付けているので皆様の御愛読をお願い致します、と書いている。
- (12) 『社報』一九四八年一〇月二日付。
- (13) 『社報』一九四八年二月一八日付。
- (14) 以下、『南海』No.6、一九四九年二月、二〇—二二頁による。
- 一九四九年一月には南海電気鉄道住ノ江診療所所長・大塚重雄及び同診療所一級社員一人に南海高等学校校医を委嘱している(『社報』一九四九年一月二五日付)。同年九月十五日には南海電気鉄道病院の開設(改称)となる(『南海』No.10、一九四九年二月)。少し先の五一年四月、大塚は「私立学校法」に基づき財団法人南海学園の組織を学校法人南海学園に改めた際に「評議員」に選任された(『社報』一九五一年四月一八日付)。
- (15) 『南海』No.7、一九四九年六月、八—一四頁。座談会の抄録は一四頁。
- (16) 同右、No.7、二三頁。
- (17) 同右、No.8、一九四九年八月、二三頁。
- (18) 同右、No.9、一九四九年一月、二五頁。
- (19) 『南海』No.10、一九四九年二月、二八頁。
- (20) 同右、No.12、一九五〇年七月、一八頁。
- (21) 以下、同右、No.10、一九四九年二月、一一—一二頁による。
- 去る九月の学年末試験は、各クラスとも各科目共平均八〇点前後というすばらしい成績をあげている。試験問題の一例(予科—国語・数学・理科・英語、本科—国語・数学・英語・物理・電磁事象・法規)が収録されている。
- (22) 第二回生徒募集は、第一回と比べると募集人員、入学志願者資格、入試科目も相当変わった。以下社報(一九四九年八月四日付)によると、予科(昼間部、夜間部)、機械科、土木科の募集人員は第一回と同様だが、本科第一学年業務科(昼間部)は一〇名減じて三〇名、同(夜間部)は二〇名減らして二〇名となっている。電気科は一〇名減らして三〇名である。本科の合計は二三〇名となる。一方、新たに第二学年業務科・電気科で若干名の編入を認めたことが注目される。入学志願者資格は次のように改められた。イ予科 小学校高等科卒業生、中学二年修了者、青年学校普通科卒業生、又はこれと同等の学力ありと認める者。ロ本科 第一学年 新制中学校卒業生、旧制中等学校三年修了者、青年学校本科一年修了者、又はこれと同等の学力ありと認める者。第二学年 旧制中等学校四年修了者、青年学校本科二年修了者、又はこれと同等の学力ありと認める者。試験科目は、予科が国語・社会(一般常識)・数学。本科は国語・社会(一般常識)・数学・英語(第一学年、第二学年共)と、相当ハードになったのである。
- 第二回入学試験の結果は、社報(一九四九年九月二九日付)による

と、二学年編入の入学許可者は業務科（昼間部）五名、電気科四名である。第一学年業務科（昼間部）八名、同（夜間部）三名、電気科一六名、土木科一名である。予科（昼間部）の合格者は三六名、同（夜間部）は二七名、編入を入れて一〇〇名であり、第一回を大きく下回った。入試科目の変更などが影響したのであるうか。

(23) 「社報」一九四九年九月二八日付。

(24) 以下、とくに断らない限り、『南海』No.24、一九五二年二月、八一―一頁による。

(25) 「湯浅学園高等学校」は、一九四八年湯浅電池社長湯浅裕一により、定時制高校（普通課程）として設立されたものである（『大阪府教育百年史』第一巻概説編、七一八頁、大阪府教育委員会、一九七三年）。

(26) 前掲『南海』No.24、八頁。

(27) 「社報」一九五二年九月二日付。

(28) 前掲『南海』No.24、二二頁。

(29) 以下、同右、No.28、一九五三年二月、一一―一三頁による。

(30) 『清風南海学園創立50周年記念誌』三四頁、清風南海学園、二〇一三年。以下、『創立50周年記念誌』と略記する。

(31) 前掲『戦後史大辞典』増補縮刷版、六二五―六二六頁。

(32) 前掲『大阪の私学』二二〇頁。

(33) 『一九五八年大阪府学校一覧』教育タイムス社、一九五八年、七五頁。

(34) 「社報」一九五五年九月三〇日付。

(35) 「社報」一九六一年三月二日付。

(36) 同右。

(37) 『清風南海学園創立45周年史』二七頁、二〇〇八年。

(38) 同右、五二頁。

(39) 以下、同右、二七―二八頁、前掲『創立50周年記念誌』三四―三五頁による。

(40) 前掲『創立50周年記念誌』三五頁。

(41) 難波駅の変遷は、『南海電気鉄道百年史』九四―九六、三三八―三三〇頁、一九八五年を参照。

(付記) 本誌第17号、第18号所収の拙稿に続いて、今回のノート作成に当たっても、南海電気鉄道総務部広報課の各位に大変お世話になった。数年来、何かとご高配賜っていることに、改めて深甚なる謝意を表する次第である。